

## スタッフルーム Staff room

# いっぱいあってもいいじゃないか!

きのしたり さ こ  
木下理咲子

(薬学メディアセンター)

『おれの名まえは、いっぱいあってな。』

大好きなセリフである。このセリフと出会った頃の私は、周囲より少しばかり背が高いくらいのごくごく普通の小学生であった。学校に行くのは楽しかったが日々の宿題は憂鬱で、長期の休みには心が躍ったが膨大な宿題は憂鬱で…。しかし、そんな憂鬱の種であった宿題たちの中で唯一楽しみにつながるものがあった。夏休みの読書感想文である。間違っても読書感想文自体が楽しみだった訳ではない。読書感想文用にと母が買ってくれる本がとても楽しみだった。いつもは「本は図書館で借りるもの!」なのに、夏休み前のこの時は「どれがほしい?」ときかれる。たとえ選択肢が青少年読書感想文全国コンクール用の課題図書であったとしても、ピカピカの真新しい本を自分のものにできる喜びはとても大きかった。

そんな夏の楽しみから私は1冊の本を手に入れた。斉藤洋さんの『ルドルフとイッパイアッテナ』（講談社、1987年）である。きつと読んだ方も多ことだろう。小さな黒ねこルドルフが、ひょんなことでたどり着いた都会の片隅でノラねこのイッパイアッテナと出会い、さまざまな経験をおして成長していく物語である。

冒頭のセリフは、ルドルフとイッパイアッテナの出会いの場面で出てくる。ルドルフが大きなトラねこに名前をたずねると「おれの名まえは、いっぱいあってな。」と返ってきて、イッパイアッテナという名前だと勘違いしてしまう。本当は「名まえがたくさんある」という意味なのだが、初めて読んだとき、イッパイアッテナという言葉の響きや彼らの軽妙なやり取り（ちなみにイッパイアッテナは江戸っ子である）、字が読めるねここという設定も面白くて、あつという間に読み終えてしまった。その後も何度読み返したことか。

だが、そんな大好きな本も成長とともに本棚から取り出すこともなくなり、久しぶりに思い

出したのは数年前に公共図書館での仕事についてたときだ。児童コーナーに並んだ見覚えのある本。懐かしくて思わず手に取った。本の中ではあの頃と同じように小さな黒ねここと大きなトラねこがテンポよく会話を交わし、時には街中を時には学校を元気に走り回っていた。もちろんあのセリフも全く同じだ。

『おれの名まえは、いっぱいあってな。』

昔のように「ああ、面白かった!」と読み終わるはずだった。が、私の頭の中を駆け巡ったのは。

「いっぱいあってもいいじゃないか!」

私にも予想外に増えてしまったものがある。履歴書に並ぶ職歴だ。自らがやりたいと思える仕事を選び、1つ1つの仕事は全力で取り組んできた。とはいえ、数年で刻む職歴が一時停止線のように感じられ、複雑な思いが常に心の中にあつた。そんな時に再び手にしたこの本の中で、たくさんの名前を背負い、経験から多くを学びとり、ひょ

うひょうと生きるイッパイアッテナの姿がとてもかっこよく見えた。

職歴が増えたとしても、それとともにできることはその倍以上に増えている。私にとって無駄になることなんてない。いっぱいあってもいいじゃないか!—今思うと呆れるほどの開き直り思考だが、この時の思いに従った結果として、今こうして慶應義塾で仕事をしている。

薬学メディアセンターでの事務嘱託としての勤務も、まもなく最後の年を迎えようとしている。思い切って飛び込んだ大学図書館の世界で、まだまだ得るものの方が圧倒的に多い。そんな中で、昨年、以前の仕事の経験を買われ薬学メディアセンターウェブサイトのデザインリニューアルに携わる機会を得た。職歴とともに少しずつ積み上げてきたものが目に見える形で繋がったことは、私に大きな感動と自信をくれた。だからやっぱり思う。

「いっぱいあってもいいじゃないか!」



イラスト：町田育代